

2019.6
(公社)富山県薬剤師会
広報誌

とみ やく 富 薬

6号

第41巻
No.359



アマチャ *Hydrangeaserrata* Ser.var. *thunbergii* Sugimoto (ユキノシタ科 Saxifragaceae)

生 薬 アマチャ（甘茶） 9月に地上部を刈り取り、葉をしごいて取り、水洗後ひろげて陽乾する。乾いた葉に水を打って湿らせ、むしろをかぶせて1日放置して発酵させた後、手でよく揉んでから乾燥する。

成 分 イソクマリン：phyllodulcin（甘味成分）とその配糖体， thunberinolA,B,C、フラボノイド：quercetin, rutin, kaempferol 等。

効 能 甘味、矯味薬として丸剤など家庭薬、口腔清涼剤の原料として用いる。

生薬 アマチャ

元富山県薬事研究所
薬用植物指導センター

村上守一氏 写真撮影

〇〇表紙について〇〇



アマチャはヤマアジサイ (*H.serrata*) の一変種と考えられ、本州中部の湿気がある谷間や樹陰にまれに自生、または栽培される落葉低木で、茎は叢生します。葉は長楕円披針形～卵形、鋸歯縁で両面の脈上に粗毛があります。葉を生で噛むと苦いが、その内甘みも感じます。6～7月に枝先に集散花序を付け、周辺に4枚のがく片が発達した装飾花を咲かせ、内に小形の両性花を多数咲かせます。同じくヤマアジサイの変種で伊豆天城山、箱根に自生するアマギアマチャ (*var.angustata*) が見つかっています。甘味はアマチャより弱いですが、*phylodulcin* を含有しています。葉はヤマアジサイより細く披針形から狭長楕円形です。

日本固有種であるアマチャが何時ごろから使われ始めたかは不明ですが、本草書に登場するのは江戸初期の『多識編』(1612)で「千歳薬、今案ずるに阿末知也」とあるのが初めてです。この「あまちや」が現在のアマチャと同等の物かは明らかではありません。千歳薬について陶弘景(456–536)は「千歳薬は藤生で葡萄のようなものだ。葉は鬼桃(ゴレンシ *Averrhoa carambola*) に似て木の上に蔓延し、汁は白い」と言い、つる性で現在のアマチャとは程遠いものを指してるようです。『大和本草』(1709)には「若水(稻生若水1655–1715)千歳薬をツルアマ茶と訓す、非なり。……甘茶、別に又一種あり。花はあつさいに似て小なり。是も甘茶とす」とあり、千歳薬はツルアマチャとし、またアジサイに似ているものも甘茶として取り上げています。

同時期の園芸書『花壇地錦抄』(1695)に「甘茶、花形あぢさいのちさき物なり。葉をあまちやにするに、むして細末して用る。世間にて、つるに出る草をあまちやといふ、あやまりなり。子供すかしのあまちやにや、此木を金銀草共いう。花色春青く、夏は赤色、秋の比むらさきのように見ゆる。冬は霜かれてしろし。但し、春咲し花四季共に有、四度咲にはあらず」と園芸的価値も認められていたようでアジサイ属の植物として花序の周りの装飾花のがく片が枯れ落ちないことまで記しています。今でも茶花として重宝されています。後の『本草綱目啓蒙』(1803)には常山の項に「土常山は……木あまちやとも云う。城州(山城)の宇治田原に園をなして栽ゆ。葉を採り、蒸し揉て青汁を去り、飲とす。甚甘し。今四月灌仏に供する者是なり」とアジサイ属のアマチャが栽培され、灌仏会に用いられていたことが記されています。

灌仏会はお釈迦様が約2,500年前インドのルンビニの花園で生まれたときに9匹の龍が現れ、「甘露の雨」を降らせたという伝説に由来する誕生日を祝う仏教行事です。インドではグプタ王朝時代(320–550)には四月八日に仏像を乗せた山車を引いて街を練り歩く行事が民衆の間で行われていた記録が残っています。中国においても『洛陽伽藍記』(5世紀)に釈迦尊像を神輿に乗せて町中を練り歩く行事が記されています。日本では仁明天皇の承和七年(840)に仏像に香水を注ぐ儀式が清涼殿で行われた記録があります。江戸時代中期(1651–1745)にはほぼ現在の形をとるようになり、誕生した時の姿と言われる右手で天を指し、左手で地を指し、「天上天下唯我独尊」と唱えた姿と言われる誕生仏を花御堂に安置し、「甘露の雨」、つまり柄杓で甘茶をすくってかける行事になっていたようです。『秋苑日涉』(1807)には「四月八日。寺院で浴仏会為す。盆を以て銅仏を坐し、甜茶水を以て浸す(甜茶漢名千歳薬)。覆すに花亭を以てす。随喜の者小杓を以て灌仏す」とあります。

(村上守一 記)